

やまたらけ

YAMADARAKE

No. 97

March
2022

何づらか？

こりゃあいったい、

序

下の写真は、小正月に早川町奈良田集落で見られるもの。写っている木製の人形のようなものは『オホンダレ』と呼ばれる。木はヌルデ（奈良田ではヌルデを「カツノキ」と呼ぶ。以下、奈良田での呼び方を「」で示す）が用いられ、伝統的には二尺五寸くらいの大きさで、皮を削って眼鼻口髭など顔の形を描く。正月十四日に門口のそばに飾られ、二十日に片付けられる。二本一對で、この2つは夫婦であるとされていて、写真左の髭のない方がオンナとなる。

古くからのものと思われるこの風習が、いまでも何軒かで続けられている。ただ、何のためにもオホンダレを飾るのか、「よく分からないが、魔除けの意味があるんだろう」とされ、早川町誌の年中行事の項でも「他の町村という門入道であろう」と紹介されている（文献1）。我が家でも毎年飾っているが、このところ《魔除け》に少し違和感を持ち始めていた。ご覧のように、オホンダレの頭には削り花（「ハナ」「ガキバナ」「ドフォーバナ」など）や、リョウブ（「ダンスバラ」）の小枝に団子や餅をつけた

「ハナモチ」「ハナダンゴ」が添えられ、むしろ目出度い様子。また、二本一對であるが、その二本よりもやや小さいオホンダレを一本、二本と加えて立て、「親だけでは寂しいから、子供があってもおかしくねえら・・・」と答えたという奈良田人のエピソードも残っており（文献2）、そこに注がれている眼差しも温かい。《魔除け》の意とはミスマッチな気がしてならないのだ。

そこで本号では、「オホンダレ考」と題する試論を通じて、この地域の基層文化に思いを馳せつつ、奈良田に見られるこの愛らしい小正月風習を、皆さんに紹介したい。（上原佑貴）



日付	おこなうこと
12/30	● 大晦日 松ハヤシ節句に山からとってきた松を飾る。三が日に食べるご飯を準備する
1/1	● 正月 氏神のお参り、親分への挨拶
1/2	● 仕事始め 何かしらの仕事をする
1/3	● 不浄日 何もしない
1/7	● 送り松 松を下げ、七草粥を食べる

日付	おこなうこと
1/14	● 宵祭 ツクリモノなど、十五日の支度をする
1/15	● 十五日粥 小豆粥を炊いて食べる。カユカキ棒で豊凶を占う
1/16	● オハナイレ お墓参りに行く
1/17	● 山の神祭 弓を張って、御幣（奈良田では「オシンメ」と呼ぶ）とお洗米とともに山の神に供える。ヤマに入らない
1/21	● カンムリオトシ 前日にオホンダレをはずす。この日は決してヤマに入ってはいけない

表 奈良田の正月行事

先駆樹木「ヌルデ」

ヌルデは先駆樹木（パイニアツリー）の代表的な一種である。先駆樹木とは、植物が生えていないような裸地に真っ先に侵入する木のこと、森林の伐採跡地や崩壊地、造成斜面などに生えてくる。早川町内でもすぐ見つけることができ、早川本流沿いにもよく生えている。ヌルデの他に、ヤシャブシやハンノキなども、先駆樹木としてよく知られている。

奈良田ばかりでなく、早川町内の他集落や国内の広い範囲で、正月にはヌルデがよく利用される。特に小正月のツクリモノによく使われ、農作物の生育や豊作を予祝するものが多いようだ（文献3・4）。

焼畑との関連性

焼畑地にヌルデがよく生えるということも、正月利用する地域や焼畑実践地で認識されているようだ（文献4・5）。焼畑とは、山林や原野を伐採

してから火をつけて焼き、焼き跡を農地（山畑）として作物を栽培する農法である（写真①）。焼いた灰はそのまま、肥料として利用する。その山畑で3年程度耕作を続け、その後は十数年以上耕作を放棄し、地力の回復を待った後で、また同じように山を焼き、再び農地として利用する。そのため焼畑農地は切替畑とも呼ばれる。一度灰土と化した焼畑地に、真っ先に生えてくる先駆樹木ヌルデの目覚ましい再生力に神秘性を見出し、農作物の生育や豊作を予祝するツクリモノに利用するというのは、感覚的にとても共感できる。奈良田では、「アワボ」という、粟の豊作祈願のツクリモノ（写真②）や、正月十五日に小豆粥を掻き回して、その年の実りを占うカユカキ棒（写真③）も、ヌルデが用いられる。初めて正月を迎えるお嫁さんのある家を小

お尻を叩くオカタブチという行事は、おそらくそうした豊作祈願に関連させて子宝を予祝するものだが、ここで用いられる尻叩きの棒もヌルデが利用される（写真④⑤、文献6）。アワボ、カユカキ棒、オカタブチの叩き棒はいずれも小正月行事に合わせて作られるものだが、こうして見ると、同じタイミングで、同じヌルデを用いるオホンダレも、焼畑文化に関連したものではないか、と思えてくる。

考察1

「正月行事の周期性」

奈良田の年中行事は、昭和30年代までは旧暦でおこなわれていた。その中でも、一月中におこなわれる主だった行事を上表にまとめてみた。

「カンムリオトシ」という小正月行事は、山の神のいちばん大事な日で、山の神が弓をひいて歩くといひ、そのためヤマには入ってはいけない。この山の神がひく弓とは、

1 昭和59年に再現された奈良田の焼畑



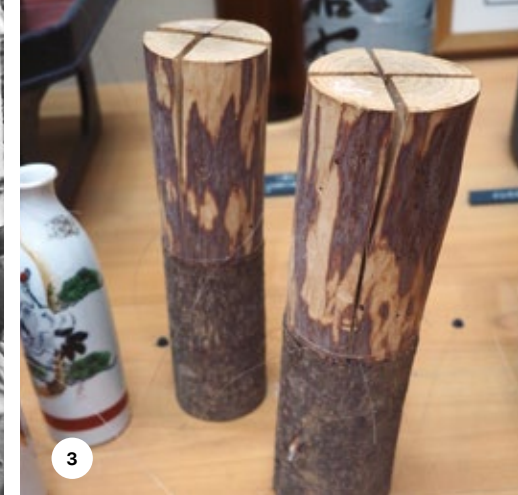
17日に山の神の小祠に供えられた弓矢。
撮影当時、弓矢が3組見える



オカタブチの叩き棒。ヌルデの皮を剥き、長い枝を1本残して、切り口には人の顔を描いたりする。オカタブチに続いて、この叩き棒で柿の木を叩く「成木責め」がおこなわれる。その際の唱え文句は「なーるか なるか ならねば伐るぞ」



オカタブチの様子。この1年間に嫁となった女子の尻を「オーカタ オーカタ いくつになりやる 三三になりやる 三三のよこは べーべのハタ 虫っくい 虫っくい」と唱えながら子どもたちが叩く



カユカキ棒。皮を剥いた半分側の切り口に十文字の割れ目を入れたものを2本作る。十五日にこれでお豆粥をかき混ぜ、割れ目への粥の入り具合で穀物の出来具合を占った（提供：早川町歴史民俗資料館）



アワボ。櫛状になった竹の先に、皮を剥いたヌルデを12本（閏年は13本）差し込む

おこなわれたものだから、山の神が焼畑儀礼と結びついて不思議はない。オホンダレの頭部に添えられた削り花は穀物が実って穂を垂れた様を現すものであり（写真⑧、文献①）、同じく頭部に添えられる「ハナモチ」も、他の地方で「マユダマ」「モチバナ」と呼ばれるものにあたり、豊作を予祝するものだろう。奈良田の場合、十七日の「山の神祭」に供えられる弓矢は、山畑に送られた畑の神を守るため、山に住む諸々の悪霊（実際には、焼畑の害獣や危険な毒蛇など）を山の神に追放してもらうための武器として供える、農耕儀礼の性格も帯びているのではないだろうか。

奈良田では年中行事が旧暦でおこなわれていたことはすでに紹介したが、小正月に先だって、しかもごく近い日に、同じく門口に飾りを立てる《鬼除け》の「節分」行事もある。オホンダレを飾ることと同じような意味合いの儀礼を繰り返す必要が、やはり乏しい気がする。まとも「オホンダレ」とは何だろう？ 考察1・2を通じて、奈良田で信仰の篤い山の神が、同じく奈良田で根強く信仰されている畑の神と関わりが深く、オホンダレはその山の神をお迎えるためのツクリモノという可能性を提示してみた。冒頭で述べた通り、奈良田人によるオホンダレへの愛情からすれば、正月らしい《神迎え》といったポジティブな捉え方の方がしっくり来る気がする。

奈良田では昭和30年まで焼畑がおこなわれていた（文献⑨）。その焼畑の伝統に属するものと考えられる神話が、古事記や日本書紀にも登場する（文献①⑩、コラム）。古事記は奈良時代に編纂された歴史書とされているから、例えば昭和30年

十七日「山の神祭」で供える弓であろう（写真⑥）。つまり、山の神はヤマから何かしらのタイミングで人の住むサトに降りてきて、供えられた弓矢を持って、またヤマへ行くのだ。すると、小正月（十五日）の支度をする十四日の「宵祭」から二十一日の「カヌムリオトシ」までの流れと、大正月の準備をおこなう大晦日（「オモツセ」）からお正月様が天竺に還るとされる七日の「送り松」までの流れが、同じようなペースでおこなわれていることに、ふと気がついた。

大正月行事では、お正月様は松をもって迎え、七日に送り出され、松は下げられる。この大正月行事のサイクルを参考にすると、十四日の「宵祭」に飾られ、小正月の最終日である二十日に片付けられるオホンダレは、山の神をお迎えするためのツクリモノなのではないだろうか。

考察2 「畑の神信仰との関わり」

興味深いのは、表1に示した大正月行事と小正月行事のちょうど中間となる十一日に、畑の神（「ハタケガミ」「ハタケノカミサン」など）を畑へ送る「鋤入れ節供」（「ハタケウナイ」）があること（写真⑦）。この神は、大晦日に天竺から降りてきて、山畑の仕事を決めた十月十日の「十日夜（トウカンヤ）」に天竺に還るとされている。畑の神が寄りつくのは大黒柱で、大晦日には大黒柱にも松を供え、門松は七日にはずされるが、こちらは十一日「鋤入れ節供」まで飾られる。そして以前は、松のはずされた大黒柱にもオホンダレを飾ったという（文献7・8）。



制作中の削り花。これもヌルデを用いる。たくさん作り、オホンダレのほか井戸や大黒、仏壇、そして墓にも供えた

鋤入れ節供の様子。大黒柱に祀っておいた畑の神の松をカイト（常畑）に立て、洗米とシトギ（「オカラク」）を供え、それから粟などを播いて「今年のアラクは、やっこい、やっこい」と唱えながら、鋤で畑を耕す動作をする。家中の者すべてが交互におこなうことになっていた（提供：早川町歴史民俗資料館）



おぼこ人形と福槌。初節供を迎える子どもに、十四日に贈られる



茂倉のオホンダレ

まで奈良田でおこなわれていた焼畑のスタイルは、基本的には奈良時代のはじめにはもう完成しており、それが以後、千年以上続いてきたわけだ。

早川の谷あいでは山に携わる者ならば、「山の神」を無下にはできないものである。であるのに、山の神についての実態は、よく分かっていない。それは記紀には描かれない領域、あるいは、それよりもはるか太古、文書にも残らないほどの昔から、この列島に根付いていた信仰に基層があるからではないだろうか（文献11）。もしかしたら焼畑農耕文化の伝来にまで遡るのかもしれない。それがいまも、何とは無しに、この流域の山地民の心に息づいている（文献12）。オホンダレの風習も、その表れの一つのように、いまは思える。

補記

早川町内でも、風習や山の神信仰において奈良

田と共通点の多い茂倉集落でもオホンダレは制作されていた（写真⑨）。そのオホンダレは、山の入口に祀った山の神の小祠にも十四日に供えられたそう。

また、奈良田では十四日のお祝として、初節供を迎える子に木製の玩具を贈る風習がある。男の子には鉄砲、福槌などを、女の子には「おぼこ」と呼ばれる人形を贈る（写真⑩）。これらは桐やサワグルミで作られることが多いが、本式はやはりヌルデを用いるようだ。また茂倉でも、小正月にヌルデで堅杵や刀、鉄砲を作って子どもに与えていたそう（文献6・8）。以上の点や他地域の事例、その他のヌルデの特性などでも踏まえた考察を試みてみたかったが、紙幅の関係もあり、本稿では奈良田のオホンダレにまつわるエピソードに焦点を絞った。

コラム

古事記における、スサノヲとオオゲツヒメの物語がそれに当たる。その部分の神話の概要は、左記の通り。

高天の原を追放されてしまったスサノヲは、道の途中、食べものの女神であるオオゲツヒメのところに寄って、何か食べさせてほしいと頼む。オオゲツヒメはもてなすが、料理する素材を、鼻や口、お尻から取り出していた。それをのぞき見たスサノヲは「そんな汚らしいものが食えるか」とかんかに怒って、盛りつけた料理を持ってきたオオゲツヒメを、なんと斬り殺してしまう。

すると、殺された女神の体からいろいろなものが生まれた。頭からは蚕が、2つの目からは稲が、耳からは粟が、鼻からは小豆が、股からは麦、お尻からは大豆……。それをカミムスヒの神が拾い集めて、人々の食べ物の種としたという。

つまり、穀物栽培の起源を説明しているわけである。日本書紀では、スサノヲの兄弟のツクヨミがウケモチ神を殺して、同じく穀物の種を得る神話となっている。この神話に、早川流域でよく栽培されていた蕎麦は登場しないが、大林は、ここで紹介されている陸田作物が、焼畑がおこなわれていた地域の作物栽培構成と、ほとんど一致していることを指摘した上で、この神話が日本の焼畑耕作の伝統に属するものであるとしている。

【参考文献】

- ①『早川町誌』、第12編「社会生活」
- ②上野晴朗・『やまなしの民俗祭り』と芸能・上巻、『三小正月』
- ③『やまだらけ』No.91
- ④野本寛一・三國信一・『人と樹木の民俗世界』、『ニヌルデ―生長力の驚異性―』
- ⑤鈴木玲治・『焼畑の技術と知恵を活かした日本の森づくり―に資する実践的地域研究』
- ⑥野本寛一・『焼畑民俗文化論』、『12 焼畑農民と木の文化』
- ⑦文化庁文化財部・『焼畑習俗Ⅱ 山梨県・宮崎県』、『儀礼と信仰』
- ⑧池田俊平・『西山村誌』西山村総合調査報告編、『西山村の年中行事』
- ⑨深沢正志・『秘境奈良田』
- ⑩大林太良・『日本民俗文化体系5『山民と海人』』、『第3章 焼畑の文化と生態』
- ⑪三浦佑之・『東北学』vol.10、『記紀神話のなかの山の神』
- ⑫上原佑貴・『住宅建築』No.487、連載第4回「小さな町の可能性―流域に生きる」

特別企画 鳥の目 虫の目

平成 14 年（2003）に発行を始めた『やまだらけ』。まもなく迎える 100 号の節目まで、上流研のこれまでの取り組みを 6 回に渡って振り返る本企画。今回は連載 4 回目です！



その
04



デジタルアーカイブ

デジタル技術を用いて作成されたアーカイブ（＝公共性または文化的な価値の高い、将来にわたって保存する価値のある資料を記録し、保存すること、また、その保存場所や保存機関）は、インターネットでの検索・参照・活用などが可能な点に特長がある。

思い返せば上流研は、設立当初からデジタルアーカイブに取り組んできた。例えば、このコーナーの第 1 回目（No.94）で取り上げた『2000 人のホームページ』もその一つ。歴史というのは、公文書や書籍のような形で残されたものを根拠に語られがちだが、しかし文字として残されていない、人々が語る、それぞれの記憶にも同等の価値があるはず。『2000 人のホームページ』は、インターネットの活用という当時では画期的な方法で、早川流域で引き継がれてきた山の暮らしをいきいきと照らし出した。いまでも公開されており、

その中には現在では聞くことのできない生の言葉もある。町民の記憶の時代と、それを切り取った平成の時代を逆照射する貴重な記録として、将来的にも再評価されるときが来るだろう。

このほか、『はやかわおもいでアルバム』に町内の古い写真を集め取材した記録が公開され、また、ウェブサイト『奥山冥利』では、同じく第 2 回目（No.95）で紹介した「やまだらけ」のバックナンバーの公開だけでなく、上流研で収集してきた地域情報や資源データをもとに、他自治体のサイトでは得られないような、濃く深いマニアックな早川流域の情報が、テーマごとの記事になって掲載されている。

デジタルアーカイブの取り組みは、学生といった町外の若者や、町民の主體的な参加といった、“上流研らしい、ワイワイとした雰囲気”を同時に生み出すのと違い、むしろ部屋の

中での、地味な作業のもとに成果物が出来上がる。アーカイブデータを活用しやすい世代や職業にある人からの高い評価の反面、その価値が共有されるまでにタイムラグもあり、上流研の活動が町民に見えにくいという課題もあった。

やまだらけ定期購読のお願い

「やまだらけ」の発行は広告料と会員の皆様の会費で成り立っています。会員として、この取り組みを支えてください。

会員の皆様には、「やまだらけ」を毎号お届けいたします。今後も「山の暮らしの価値」と、それを後世に守り伝える人々の活動をお伝えして参ります。

【年会費】 正会員：10,000 円
賛助会員：3,000 円

【振込先】 ゆうちょ銀行 ○二九店
当座 0095644

【名義人】 特定非営利活動法人
日本上流文化圏研究所

上流研の取り組みを応援していただいています！



浜田屋商店
電話 0556-48-2311

雪峰七面山の登山口であなただけの旅を支える

株式会社 **俵屋観光**
バス ジャンボタクシー

有限会社 **俵屋旅館**
宿泊 宴会 法事などに

〒409-2732 山梨県南巨摩郡早川町高住 621
電話 0556-45-2500

新築、改築、マイホームの事なら何でもおまかせ

日本建築のプロフェッショナル

株式会社 **望月工務店**

〒409-2713 山梨県南巨摩郡早川町保 1766
TEL・FAX 0556-45-2661



山の暮らしの豊かさを分かち合いたい
tsukuyomi-osukuni.com

古民家一棟貸しの宿 月夜見山荘
手打ち蕎麦と山の食 おすくに

山梨県南巨摩郡早川町西之宮 1094 ☎ 0556-45-2021

hako.
cafe | design | incense

www.hako.studio

怪談えほんシリーズ、13作目！

おめん
夢枕 獏・作 / 辻川奈美・絵 / 東 雅夫・編

「こんとん」
(爵成社)の
夢枕獏作！

●定価：1,650円 (本体1,500円＋税)

岩崎書店 〒112-0005 東京都文京区水道1-9-2-2F
TEL 03-3812-9131 FAX 03-3816-6033

太めで噛みごたえのある、
香り豊かな昔ながらの
「田舎そば」

そば処
アルプス

電話：0556-48-2666
【営業時間】 11:30～15:00
山梨県南巨摩郡早川町黒地 584-1

早川町特産品 観光PR

早川町の魅力を東京で発信します！
～お気軽にお問い合わせください～
ANNIVERSARY CONCIERGE
アニバーサリーコンシェルジュ
TEL: 03-5823-4043

毎分 1,630ℓ 湯温 52℃の掘削自噴火温泉では日本唯一を誇る新湯湧出
全てのお風呂、客室風呂、給湯、シャワーに亘るまで 源泉掛け流し

全館源泉掛け流しの宿

西山温泉 **慶雲館**

〒409-2702 山梨県南巨摩郡早川町西山温泉
TEL 0556-48-2111
FAX 0556-48-2611 http://www.kefukan.co.jp

生命保険、損害保険のことなら
株式会社 さいとうエージェンシー
tel.055-280-3360 fax.055-280-3361

自動車販売、オートリース、レンタカーのことなら
有限会社 S・T・E・P
tel.055-280-3350

sun life

〒400-0422 山梨県南アルプス市荊沢 1356-1

南アルプス街道の交通安全と
清流早川の自然を守ることを永遠のテーマに
地域社会の発展に貢献する事を目指します。

早川砂利協同組合

山梨県南巨摩郡早川町小縄 26
電話 0556-45-2450

地域発展のお手伝い！地域の暮らしを守る！

早邦建設株式会社

【本社】〒409-2732 山梨県南巨摩郡早川町高住 645-27
TEL 0556-45-3000 FAX 0556-45-2288
【生コンクリートプラント】TEL 0556-45-2700
http://www.soko3000.com/

早川町で感動体験を・・・
南アルプス生態系
光源の里温泉 ヘルシー美里
南アルプス邑野鳥公園

ご予約・お問い合わせ
TEL/0556-48-2621
http://www.hayakawa-eco.com/hmisato/

日新火災海上保険 代理店

日新火災

幡野保険事務所

〒409-3306 山梨県南巨摩郡身延町夜子沢4020
TEL 090-8014-1337
FAX 0556-42-3073

【編集後記】 本稿を編集しながら、前号(No.96)がずっと頭をよぎっていた。糸魚川静岡構造線上の奈良田では、焼畑と結びつきの強い西南日本的な山の神信仰と、東北日本的な畑の神信仰とが複合しているようだ。いろんな意味で、なんだかとても興味深い。



発行元／NPO法人日本上流文化圏研究所
住所／山梨県南巨摩郡早川町薬袋430
t: 0556-45-2160 f: 0556-45-2268
www.joryuken.net